

新発田市ひきこもり支援 実態把握調査結果の報告

令和5年2月

新発田市 社会福祉課 生活支援係

1 調査概要

(1) 調査目的

市内のひきこもり状態にある方の実態及び傾向を把握するとともに、訪問支援をはじめ、今後の総合的なひきこもり支援施策に反映させていくための基礎資料とする。

(2) 調査対象者

- ① 年齢がおおむね15歳から64歳までの方で、次の状態にある方。

様々な要因の結果として社会的参加（就学、就労、家庭外での交遊等）を回避し、原則的には6か月以上にわたっておおむね家庭にとどまり続けている状態の方。他者と交わらない形での外出をしてもよい。（ただし、義務教育在学中の方及び、重度の障がい・疾病・要介護状態のため外出できない方を除く。）

- ② 義務教育在学中であるが、長期（おおむね6か月以上）にわたり欠席状態が続いている方。（ただし、病気による療養や事由による長期欠席等（経済的理由、海外滞在等）を除く。）

(3) 調査方法

① 市関係機関への調査

調査対象機関	社会福祉協議会、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、障がい者基幹相談支援センター、指定特定相談支援事業所、小・中学校、その他関係機関
調査方法	調査対象機関に調査票AとBを配布、回収
調査期間	令和4年9月1日から11月30日まで

② 市関係課への調査

調査対象課	・健康推進課 ・こども課 ・社会福祉課
調査方法	調査対象課に調査票AとBを配布、回収
調査期間	令和4年9月1日から11月30日まで

2 調査結果

(1) 概要

調査により把握できたひきこもり状態にある方 合計 2 5 5 名
(重複の可能性あり)

市関係機関	1 4 2 名把握 (小・中学校の対象者を含む)
市関係課	1 1 3 名把握

(2) 他市との比較

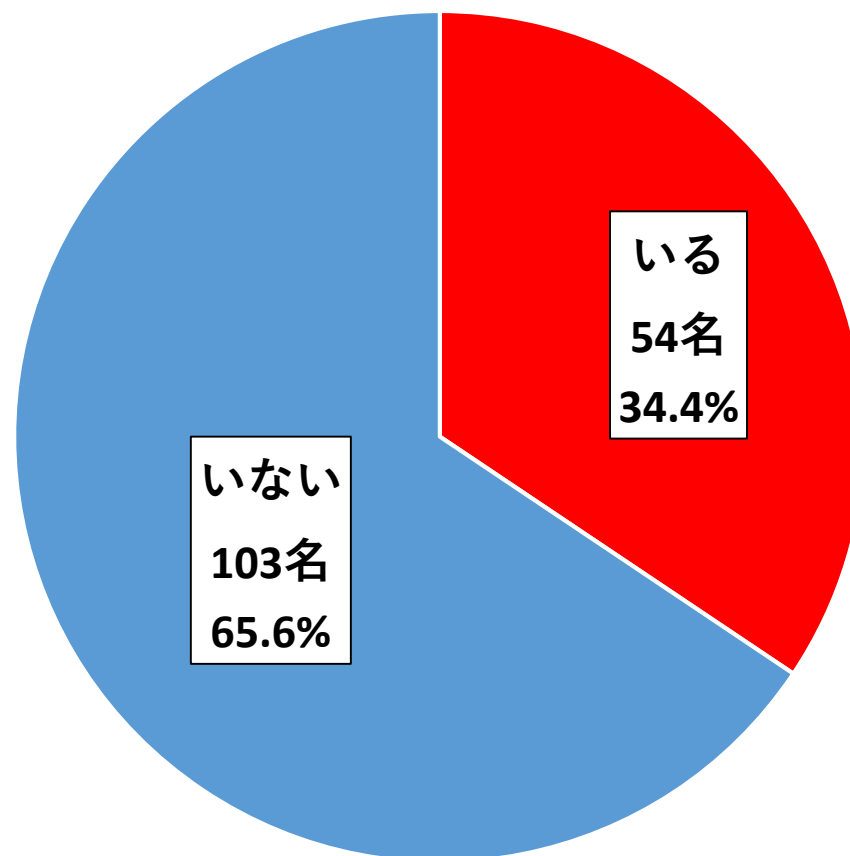
	調査期間	調査対象機関等	ひきこもり 状態にある方	人口に占 める割合
十日町市	令和元年10月~11月	民生委員・児童委員	1 4 5 名	0.29%
村上市	令和 2 年9月初旬~9月18日	民生委員・児童委員	1 3 7 名	0.24%
柏崎市	令和4年1月	民生委員・児童委員	1 2 0 名	0.15%
新発田市	令和4年9月1日~11月30日	市職員・関係機関	2 5 5 名	0.27%

（３）市関係機関及び市関係課へのひきこもり支援に関する調査【調査票Aの結果】

〈調査票Aの設問内容〉

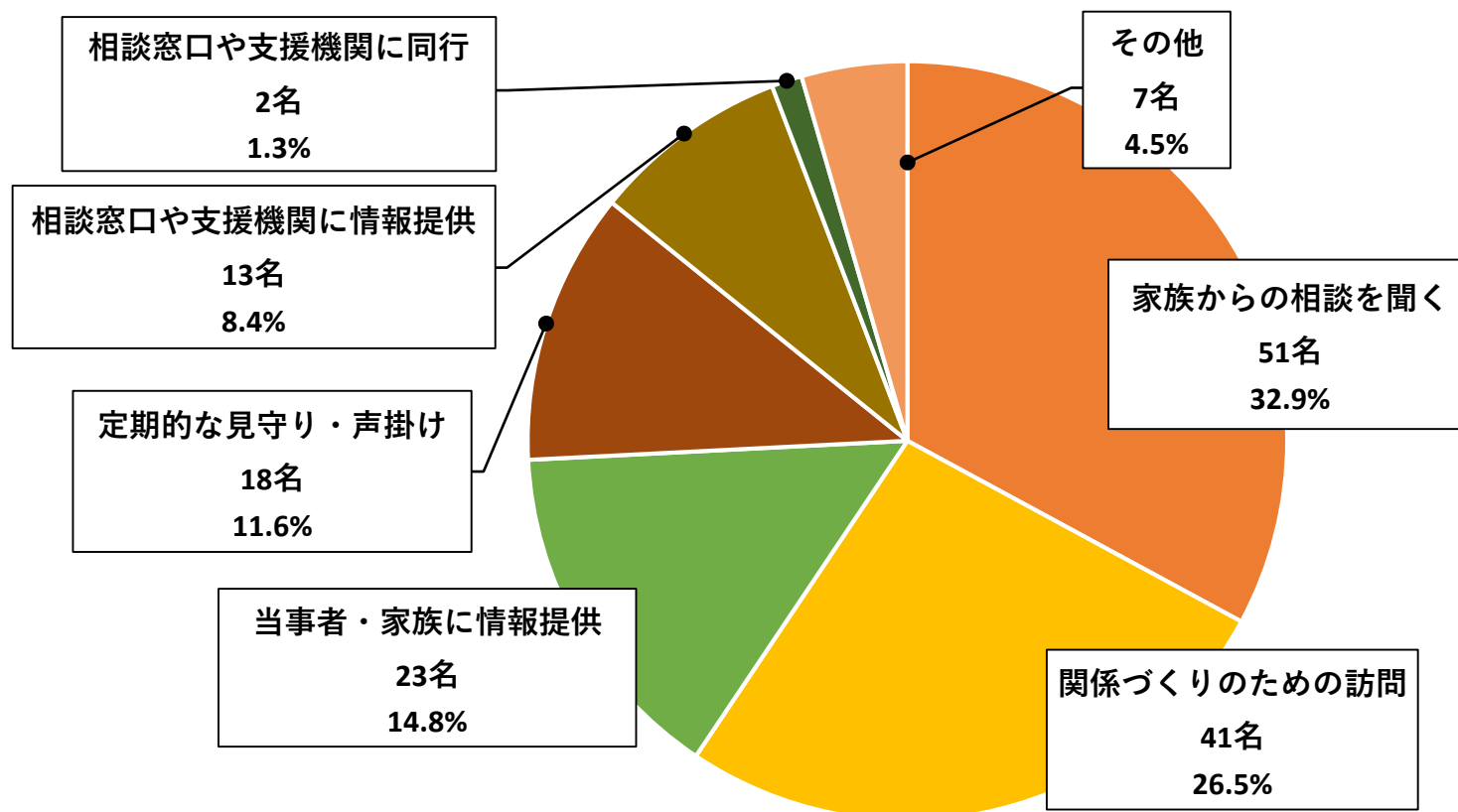
- ・ ひきこもり状態にある方の有無
- ・ ひきこもり状態にある方がいることを知った時の対応
- ・ ひきこもり支援の連携状況
- ・ ひきこもり支援で困っていること
- ・ 今後必要と考える施策
- ・ 社会復帰ケース

A 1 担当地区にひきこもり状態にある方はいるか。【回答者157名】



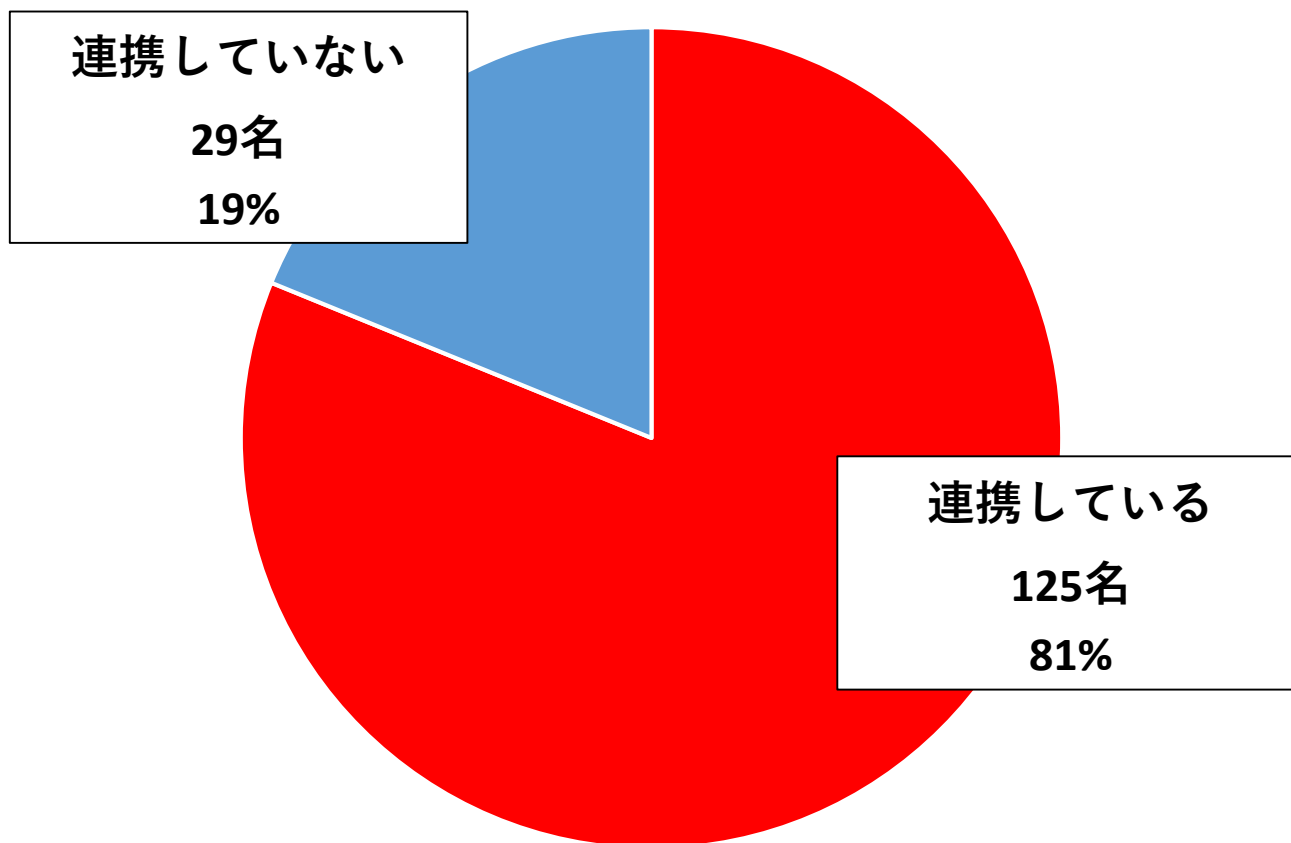
3人に1人が「いる」と回答している。

A2 ひきこもり状態にある方がいることを知ったとき、どのような対応をすることが多いか。また、どう対応すべきだと思うか。
【回答者155名】



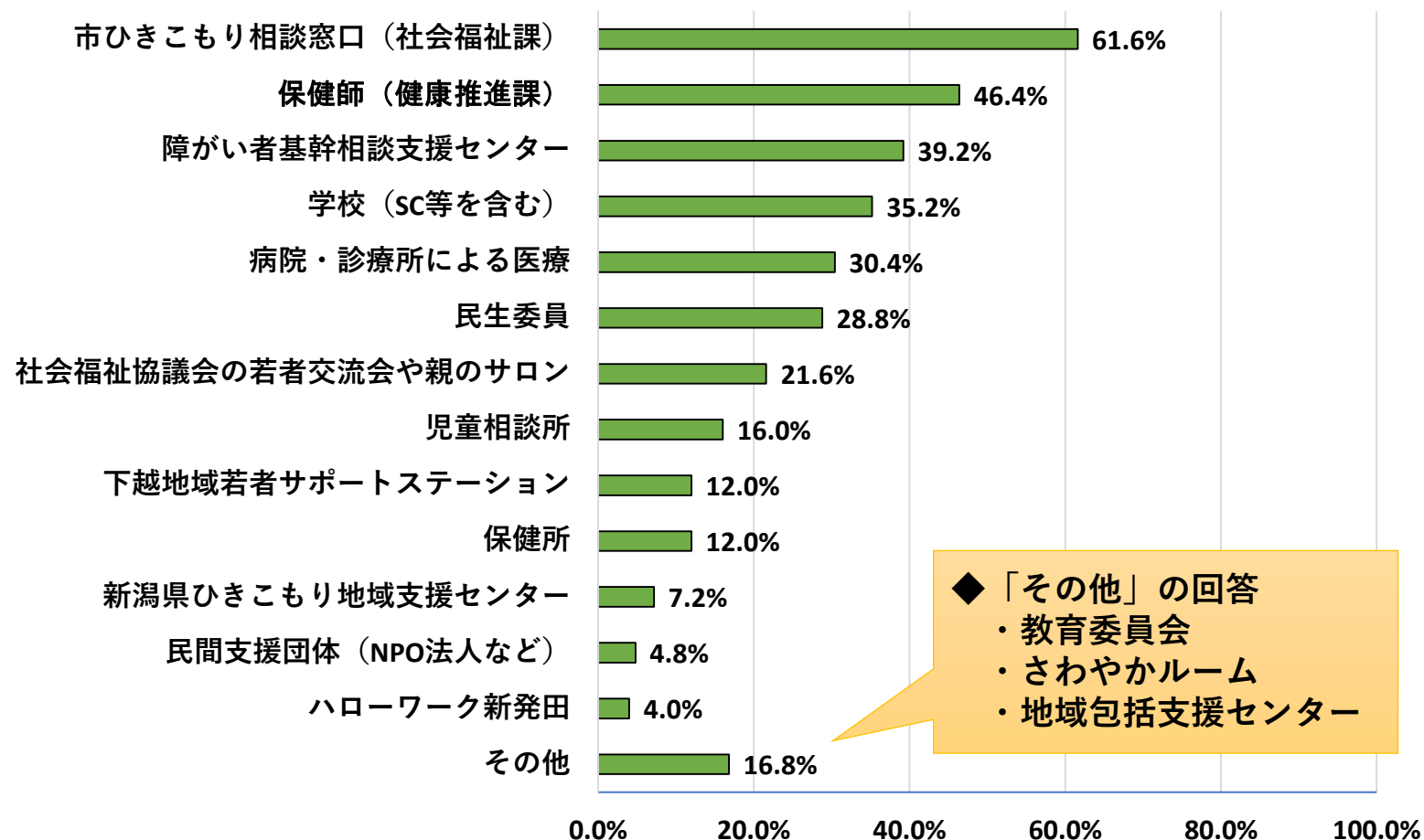
「家族からの相談を聞く」が最も多く、続いて「関係づくりのための訪問」、
「当事者・家族に情報提供」の順であった。
「相談窓口や支援機関に情報提供」、「相談窓口や支援機関に同行」は
少なかった。

A3 ひきこもりに係る相談・支援において、関係機関と連携しているか。【回答者154名】



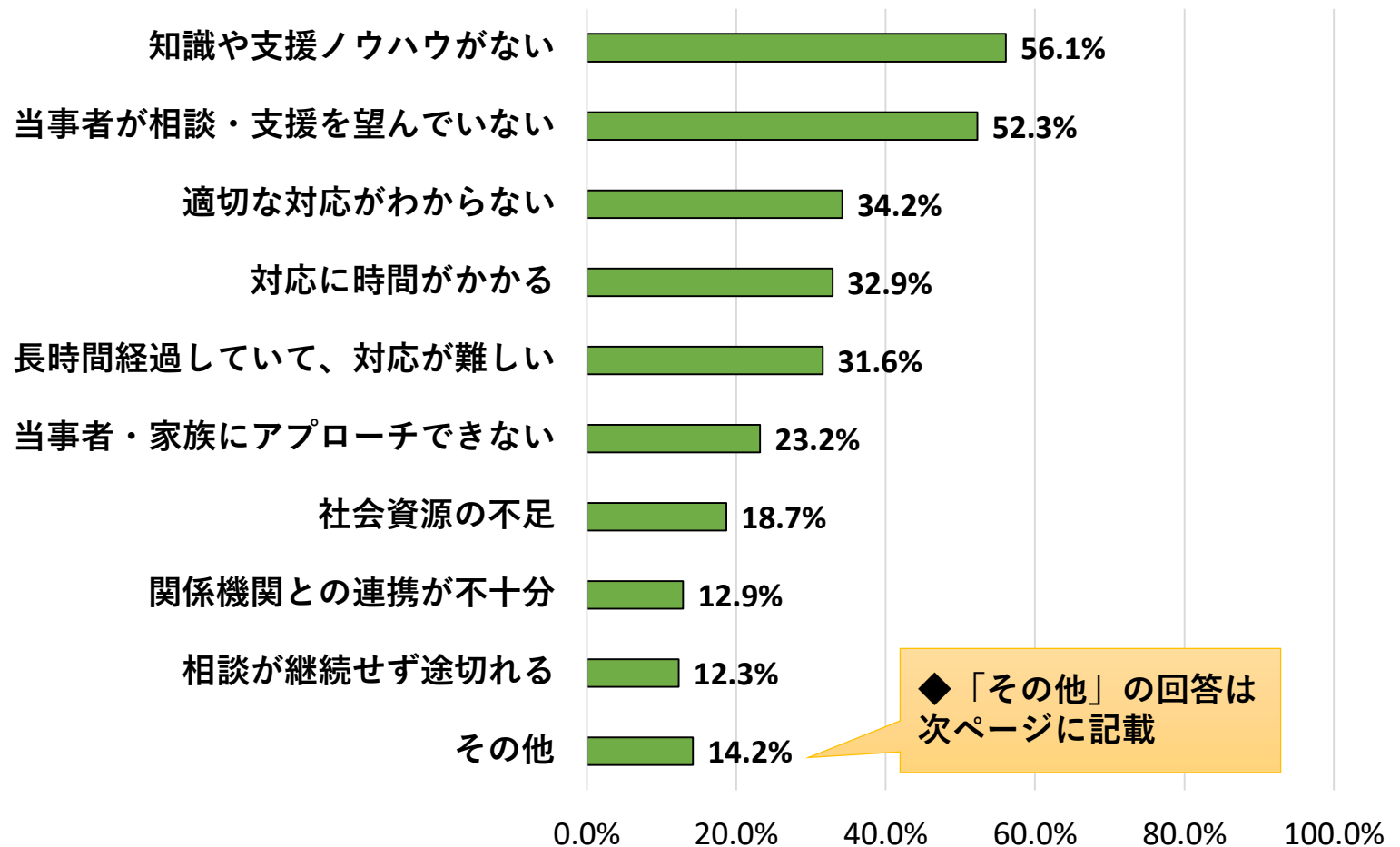
「連携している」が約8割であり、「連携していない」が約2割であった。

A4 ひきこもりに係る相談・支援において、どこの関係機関と連携しているか（複数回答可）。【回答者125名】



市ひきこもり相談窓口（社会福祉課）、保健師（健康推進課）、障がい者基幹相談支援センター等、公的な機関との連携が上位を占めている。

A5 ひきこもり支援で困っていること（複数回答可）。【回答者155名】

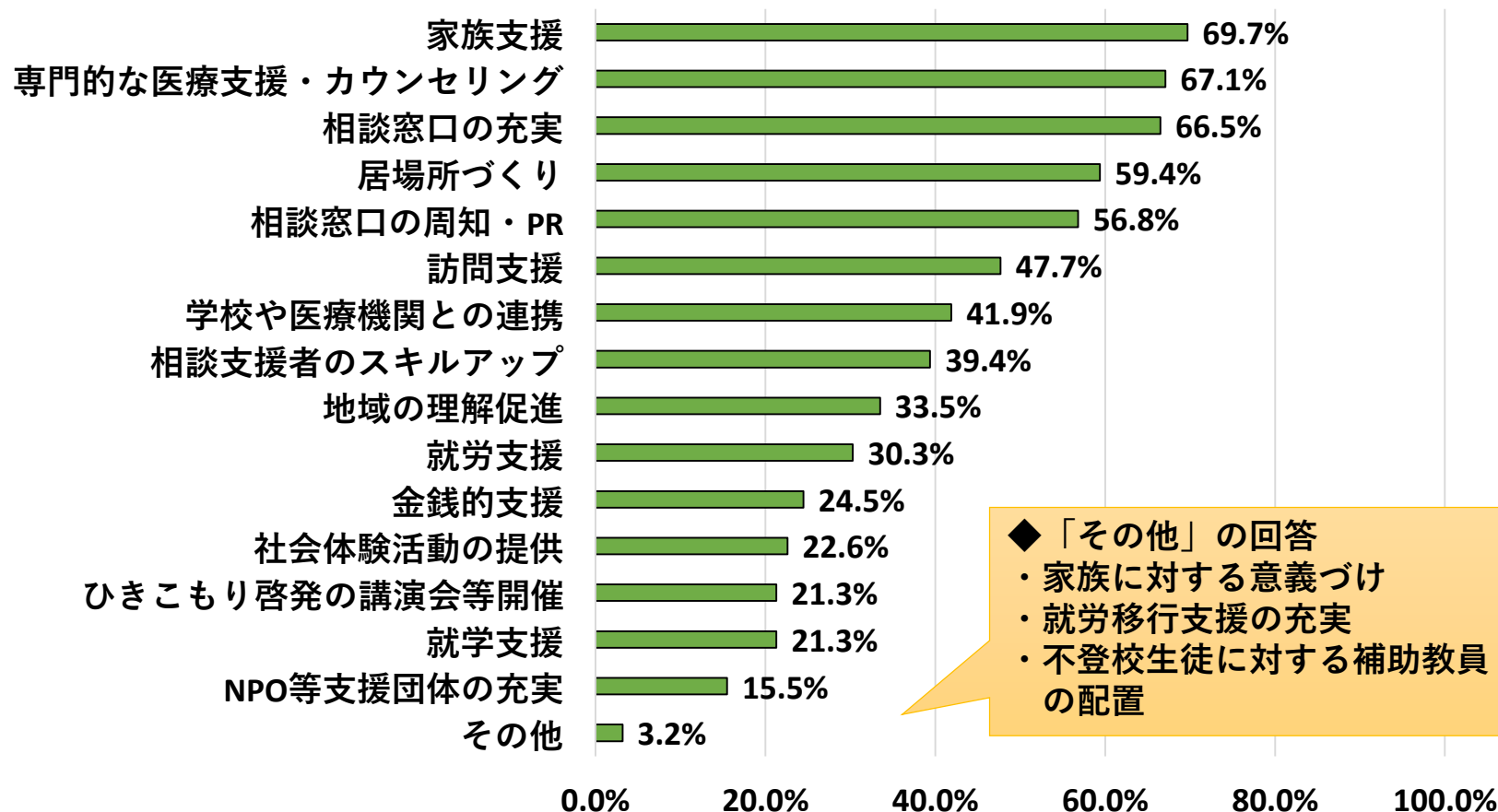


「知識や支援ノウハウがない」、「当事者が相談・支援を望んでいない」、「適切な対応がわからない」が上位3位を占めている。

◆ひきこもり支援で困っていること「その他」の回答

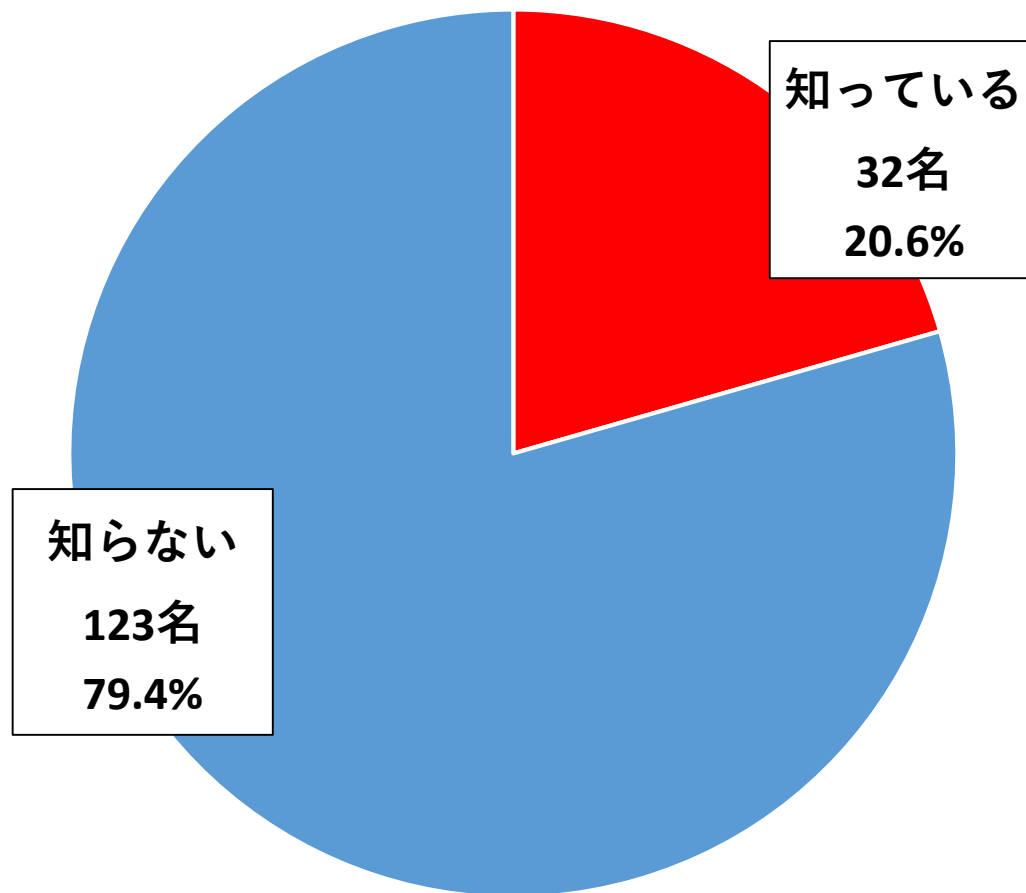
- ・ 本人や家族に困り感がなく、協力が期待できない。
- ・ 本人の問題を隠そうとしている。
- ・ 家族があきらめていると支援が途絶える。
- ・ 時間を要する、見通しが見えない、家族の疲労感が強い。
- ・ ひきこもり支援の経験なし。
- ・ 当事者の現状に適した次段階の具体的支援策がない。
- ・ 関係機関の支援方法と実践が見えてこない。
- ・ 学級担任以外の職員が少ないため、十分な対応がなかなかできない。

A 6 ひきこもり支援のために必要と考える施策（複数回答可）。 【回答者155名】



「家族支援」、「専門的な医療支援・カウンセリング」、「相談窓口の充実」、「居場所づくり」、「相談窓口の周知・PR」が上位を占めている。

A 7 ひきこもりの状態から社会復帰した人を知っているか。
【回答者155名】



「知らない」が約8割で多くを占めており、「知っている」が約2割であった。

A8 ひきこもり状態から社会復帰したきっかけ

〈社会福祉協議会〉

- ・親サロンへの参加、若者交流会への参加、ボランティア活動への参加、就労準備支援事業への参加。
- ・母が亡くなり買い物以外は何も繋がってもなく、兄弟が遠方で心配していた。何度も通い、兄弟と説得し、サービスが導入された。

〈居宅介護支援事業所〉

- ・他市町村のケースだが、包括支援センターで担当していた要支援者の孫が仕事に就くことができず、保健師さんが孫とその親の家に定期訪問し、思いを受け止めて経過を見守り、再び就職することができたと伺ったことがある。
- ・新発田市の就労支援をきっかけに就労につながった。

〈障がい者基幹相談支援センター〉

- ・ 市外の実組ではあるが、ひきこもり支援に取り組んでいるNPO法人の介入により、社会復帰できた。
- ・ 環境の変化（同居家族の体調変化、世帯構成員の変化等）、相談支援専門員との関係性構築、社会との関わりの必要性。
- ・ 理解の動機付け（障がい福祉サービスや地域活動支援センターの利用）

〈指定特定相談支援事業所〉

- ・ 利用していた作業所の定期的な訪問で通所できるようになった。
- ・ 障がい者支援事業所への紹介。一番は本人が「社会へ出たい」という思いの強さがあった。

〈小・中学校〉

- ・継続的な家庭訪問と民生委員さんとの連携、家から連れ出し、友達と一緒に遊んだ。
- ・医療支援との連携による本人への心理的、身体的ケア。子どもの得意分野をもとにした、友達との関係づくり及び自己有用感の確立による復帰。
- ・保護者との連携を密に行った上で、本人との関係を切らないように関わりを続けた。さらに、本人の通学への意欲が回復するまで学校を休むことを認めつつ、温かい見守りを続けたことが学校復帰のきっかけになったと考える。
- ・校内適応教室の設置。当事者にあった居場所になった。クラス替えによりストレスが軽減したと思われ、登校できるようになった。
- ・進級、進学タイミングや気が合う（趣味が合う）人との出会い（教職員も含めて）、友人からの働きかけなどにより学校復帰ができた。
- ・新たなクラスなど、環境の変化、クラスの仲間からの刺激、協力による復帰。
- ・本人に進学の希望があり、目標をもつようになったら別室登校を開始した。その後、教科ごとに教室復帰をし、卒業時は通常学級で過ごすようになった。環境が変わる事への期待をもつことができたことがプラスに作用したケース。
- ・中学3年生で進路に向けて意識が変わり、学校に復帰した。友人関係が良好で、友人のサポートがあり、学校に復帰した。
- ・定期的な見守り、支援、声がけを続けること。当該生徒に合った登校の形で学校に登校させる（1~2時間だけ、別室、放課後など）。
あせらず、一步一步確実に進めるステップを示していくことで、今までの変化を感じ取り復帰できた。

〈市関係課〉

- ・ ひきこもっている者は40代の男性であったが、親からの相談から市社協に委託している就労準備支援事業につながり、1年程活動した後に、大型ショッピングセンターでのバックヤード業務の就労が決定した。
- ・ 障がいサービスの生活介護や短期入所を利用して、事業所に通所するようになった。
- ・ ひきこもり研修会で当事者の体験談を聴講。10年ひきこもった当事者が、「これではいかん、何とかしたい」と感じた時に行動した。
- ・ 十分充電したので動けた。相談機関への初回相談から次々と目標を決めることが出来たといい、この方にとって、相談機関へ相談連絡を入れた時点が大きな分岐点と感じた。ひきこもりの間、家族は焦らず見守ってくれていた。
- ・ 家族から、就労していない、ゲームばかりして昼夜逆転の女性の相談を受けた。社会福祉課、健康推進課で本格的な情報収集面談の際に、就労準備支援の利用を進めたところ、ご本人が興味を示され、そのまま利用につながって順調に進んだ。
- ・ 同居家族が入院したため、必要に迫られてひきこもり状態を脱した。

A9 新発田市のひきこもり支援について、ご意見があれば自由にお書きください。

【別紙参照】

（４）ひきこもり状態にある方及びその家族について調査【調査票Bの結果】

〈調査票Bの設問内容〉

- ・ 性別
- ・ 年代
- ・ 家族構成
- ・ ひきこもり状態にある方を知ったきっかけ
- ・ ひきこもり状態になった原因
- ・ ひきこもり状態にある期間
- ・ ひきこもり状態にある方の外出状況
- ・ 医療機関や相談窓口等とのつながり
- ・ ひきこもり状態にある方や家族の支援希望

〈調査票Bの調査結果〉

ひきこもり状態にある方 合計**255名**

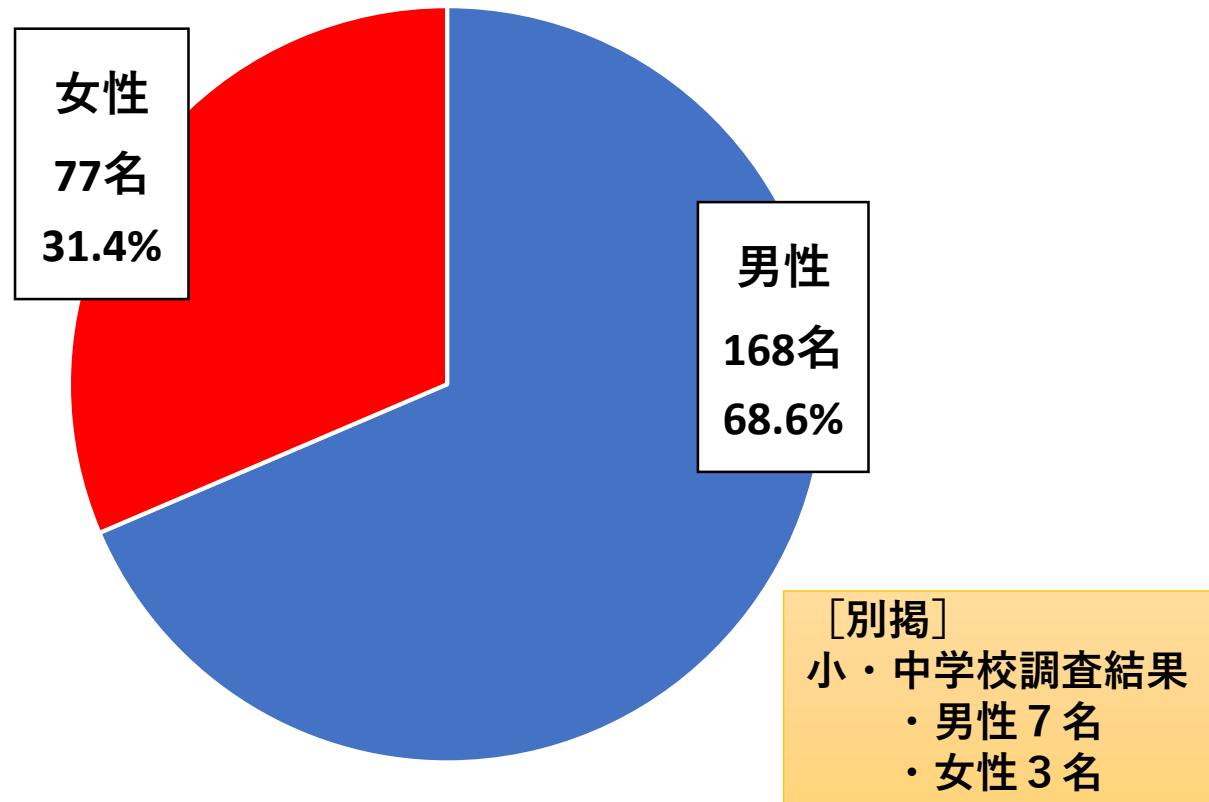
①年齢がおおむね15歳から64歳までの方で、ひきこもり状態にある方 **245名**

②義務教育在学中であるが、長期（おおむね6か月以上）にわたり欠席状態が続いている方 **10名**

※次ページ以降は、「**①245名**」についてグラフ化したものである。

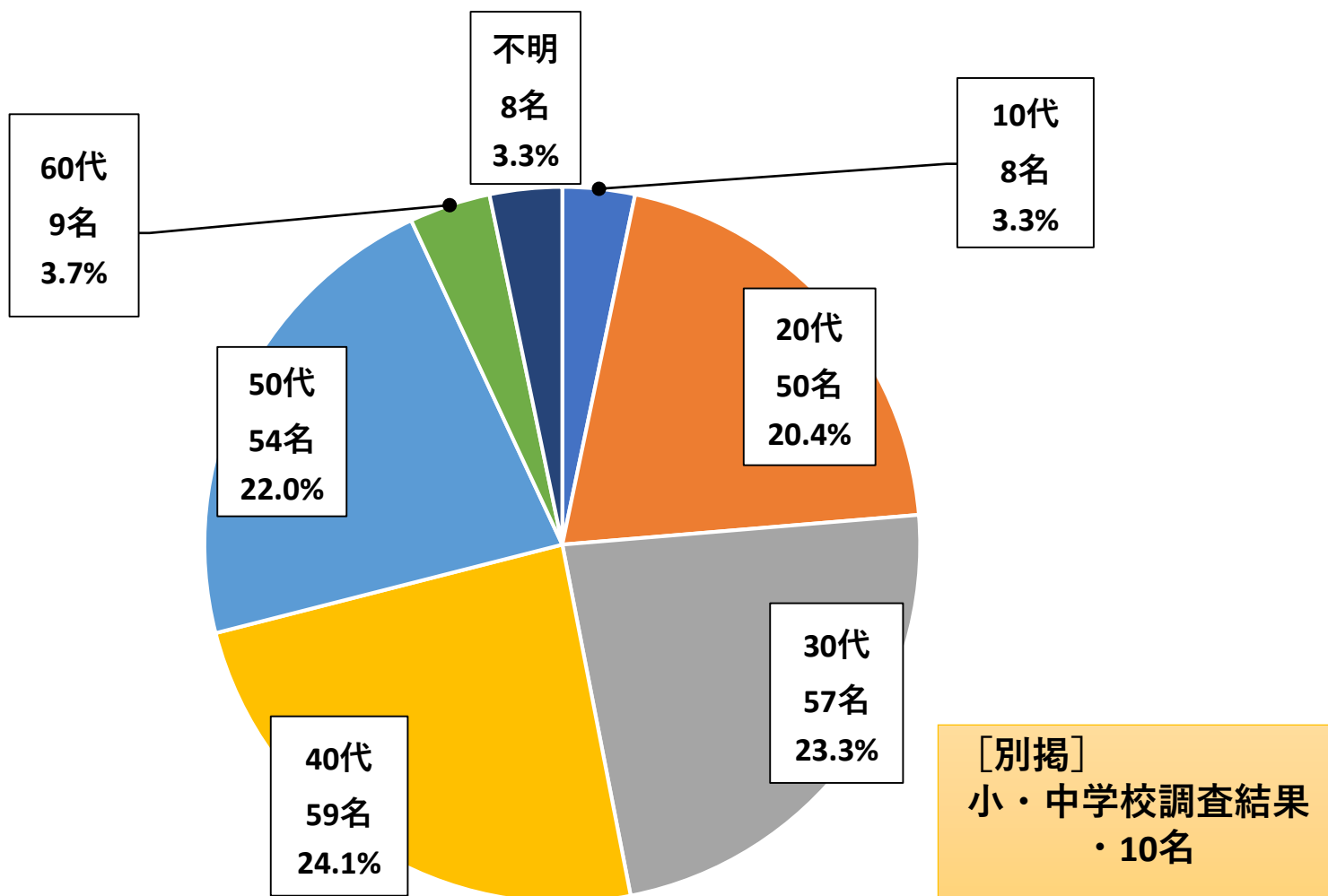
なお、小・中学校への調査は対象者及び設問が異なるため「**②10名**」は、小・中学校調査結果として〔別掲〕とした。

B1 ひきこもり状態にある方の性別



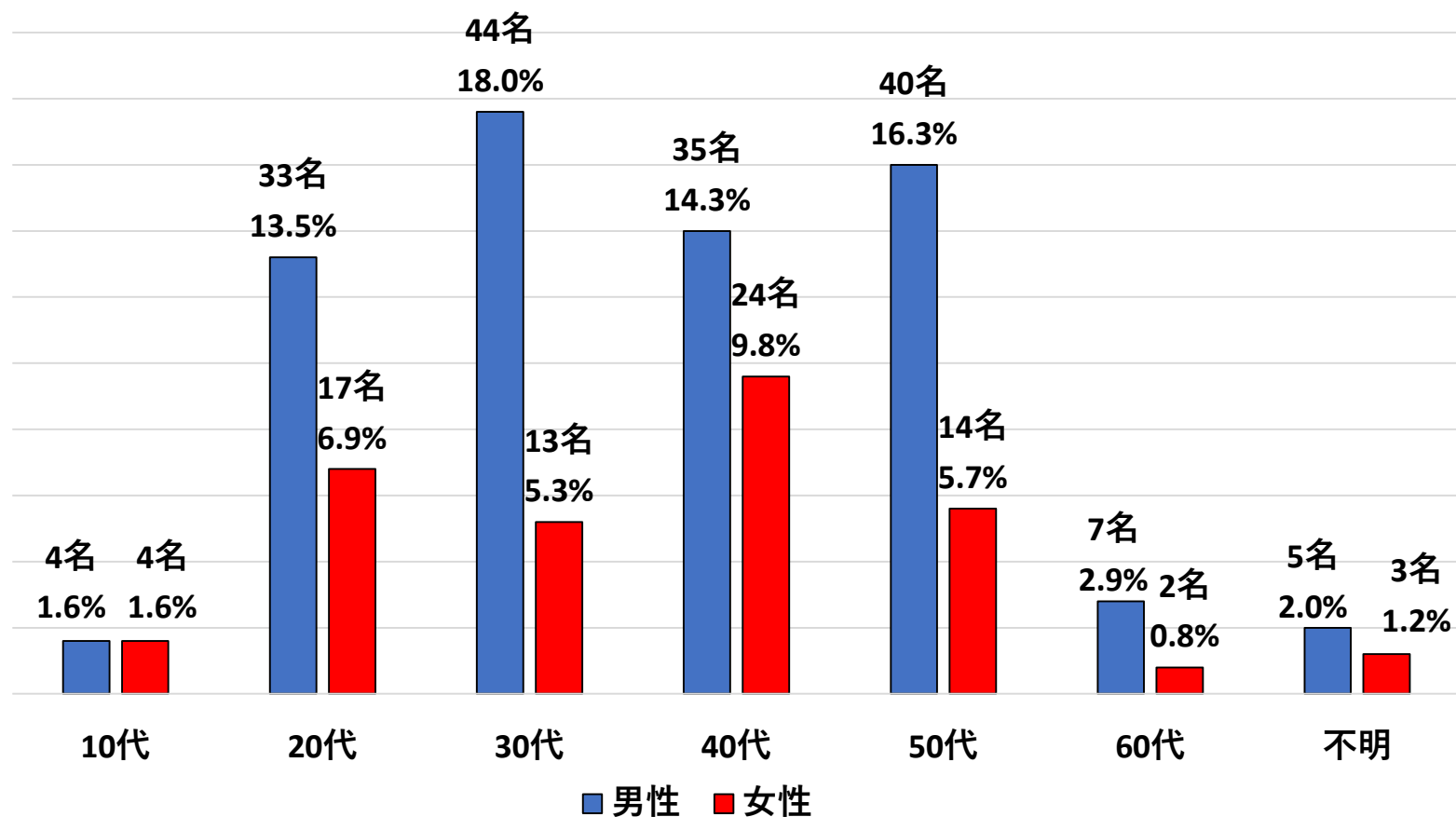
「男性」が約7割で、多くを占めている。

B2 ひきこもり状態にある方の年代



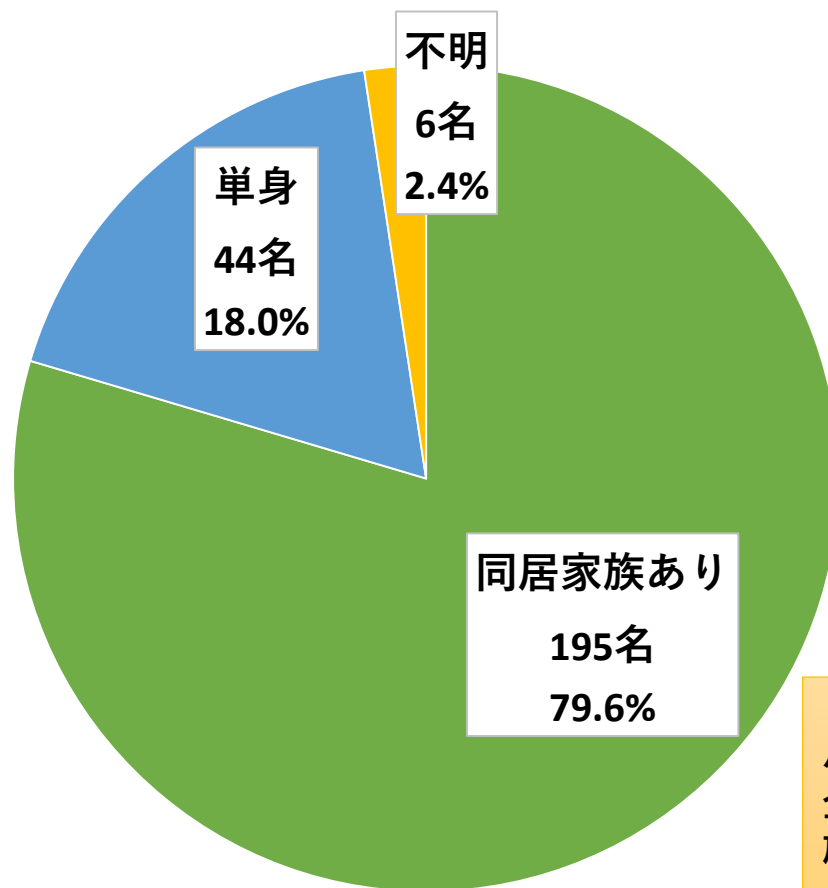
「20代」から「50代」までの各世代とも約2割であった。

◆年代別男女比



男女別の上位3位は「男性」が「30代」、「50代」、「40代」、「女性」が「40代」、「20代」、「50代」の順となっている。
「10代」を除き、どの年代も「男性」が「女性」を上回っており、特に「30代」男女比の差が最も大きい。

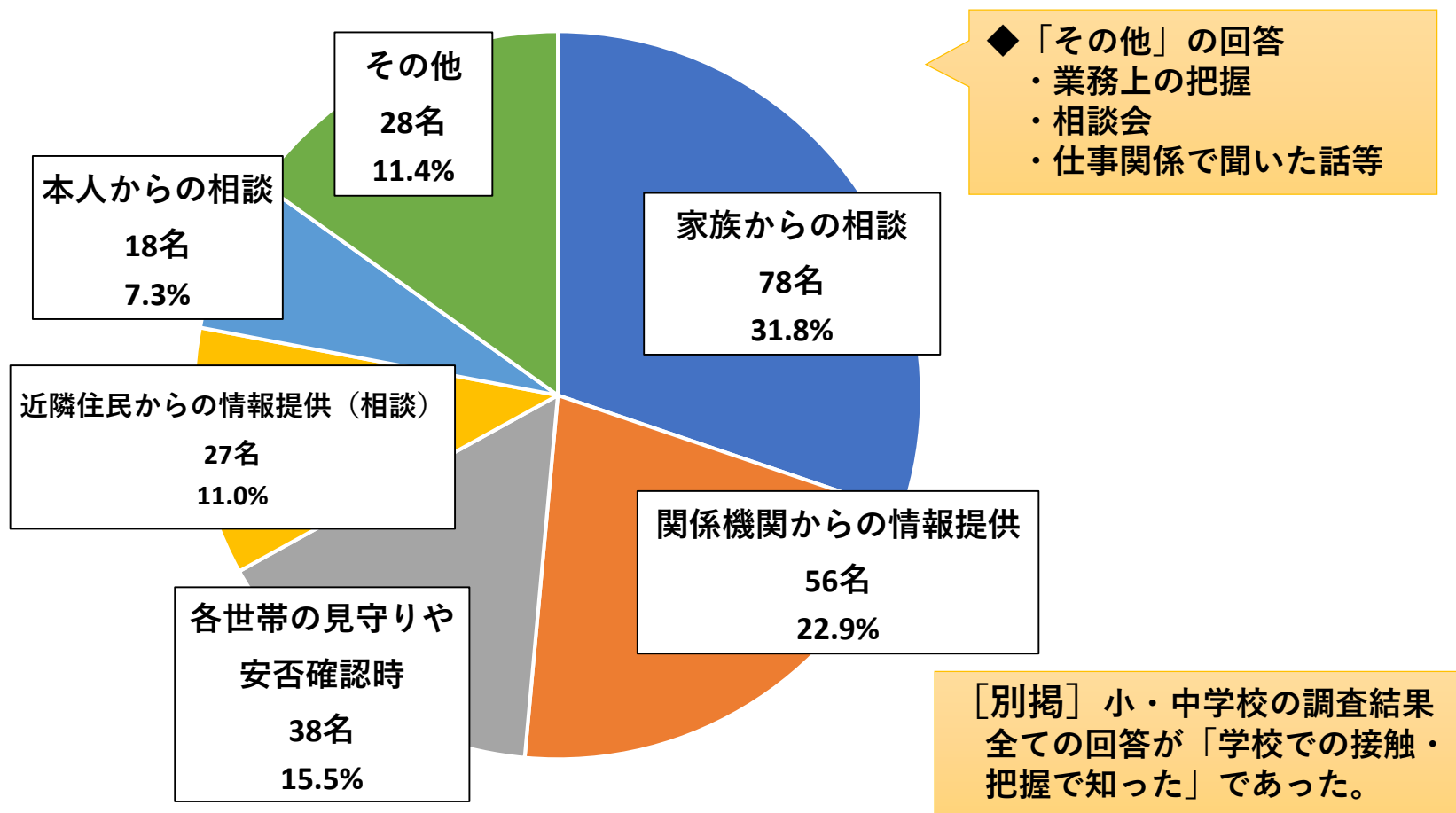
B3 ひきこもり状態にある方を基準にした家族構成



〔別掲〕
小・中学校の調査結果
全ての回答が「同居家
族あり」であった。

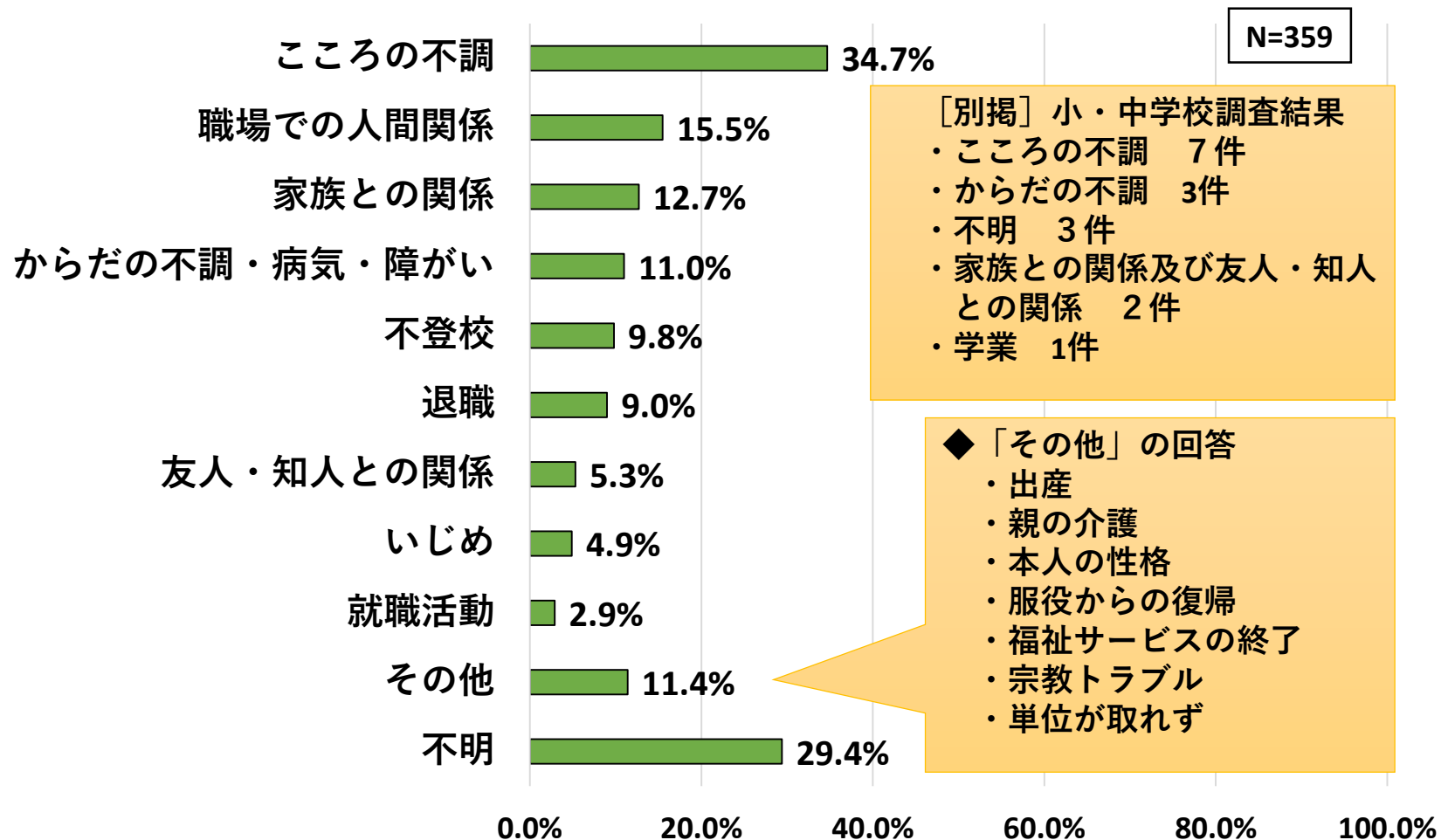
「同居家族あり」が約8割を占めており、「単身」は約2割であった。

B4 ひきこもり状態にある方を知ったきっかけ



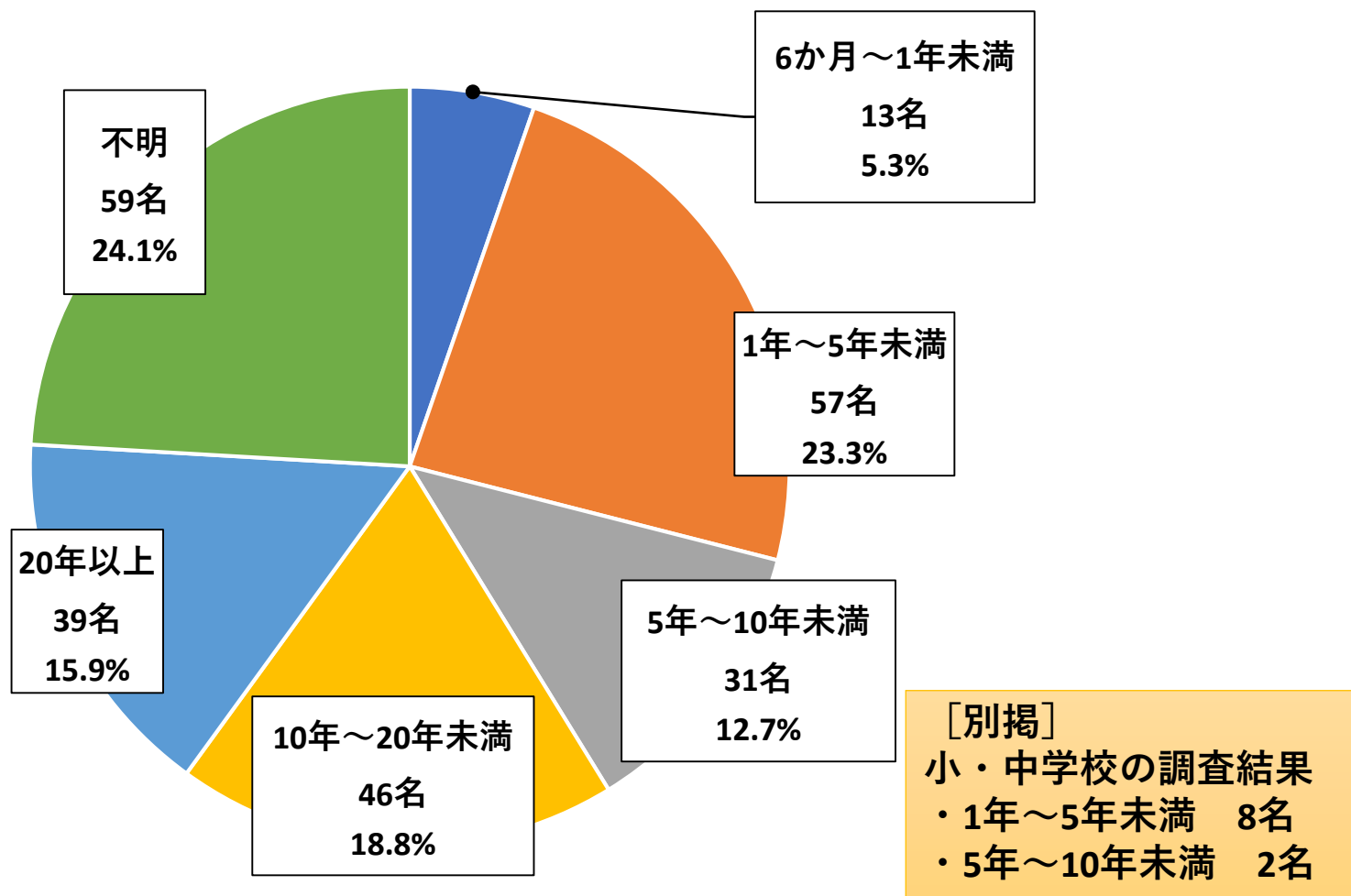
「家族からの相談」が最も多く、続いて「関係機関からの情報提供」、「各世帯の見守りや安否確認時」の順であった。「本人からの相談」が最も低い。

B5 ひきこもり状態になったきっかけ〔複数回答可〕



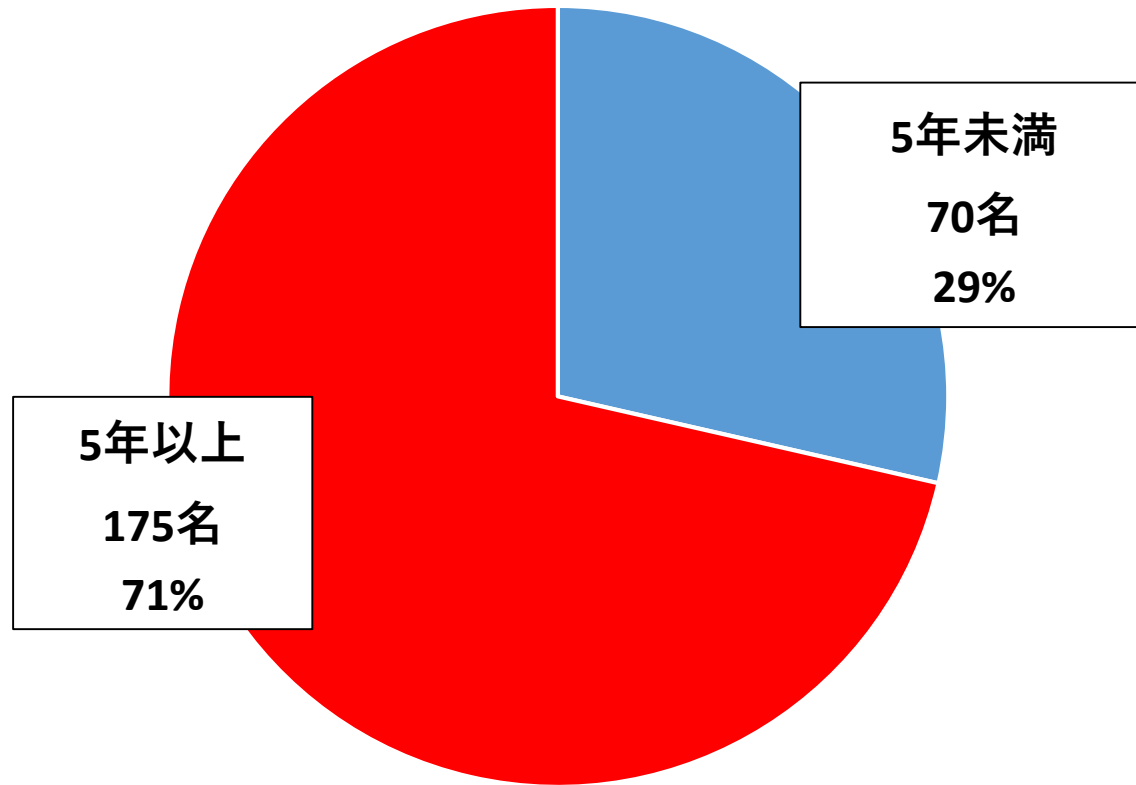
「心の不調」が最も多く、続いて「職場での人間関係」、「家族との関係」の順であった。また、「不明」も多い結果となった。

B6 ひきこもり状態にある期間



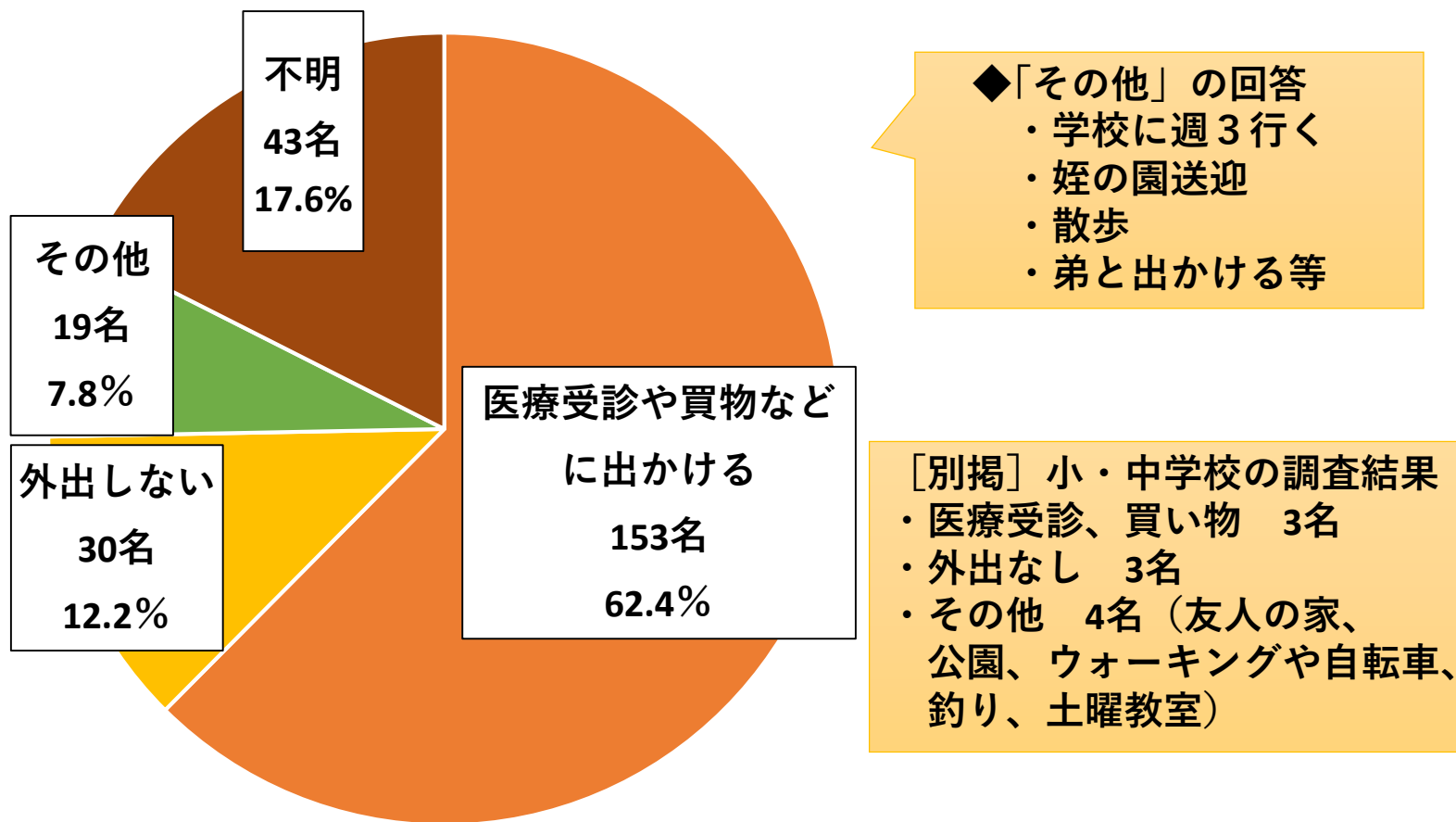
「1年～5年未満」が最も多く、続いて「10年～20年未満」、「20年以上」の順であった。

B 7 ひきこもり状態にある期間
(B6を「5年未満」と「5年以上」で再掲)



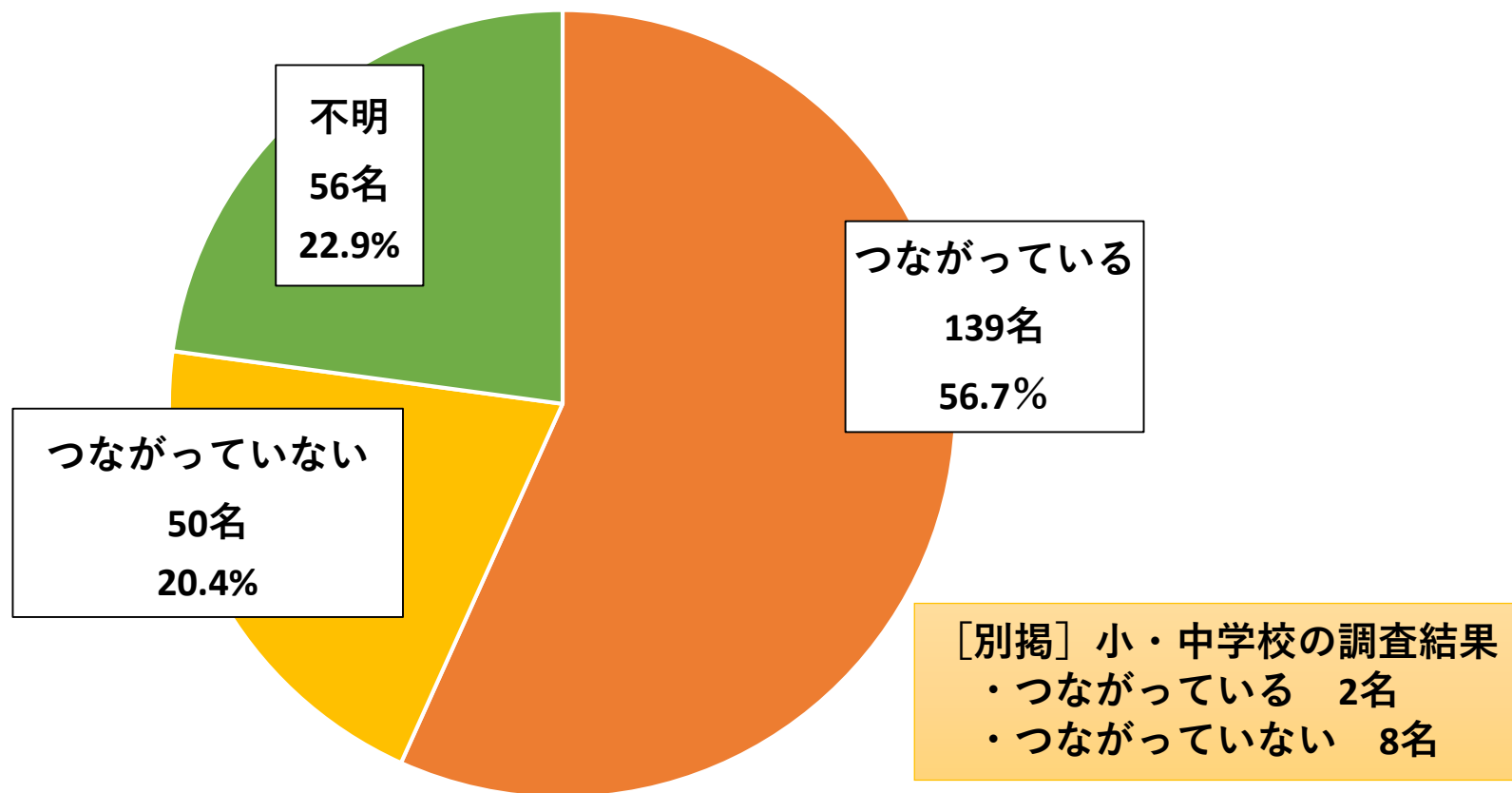
全体的に見ると、「5年以上」が7割以上である。

B8 ひきこもり状態にある方の外出状況



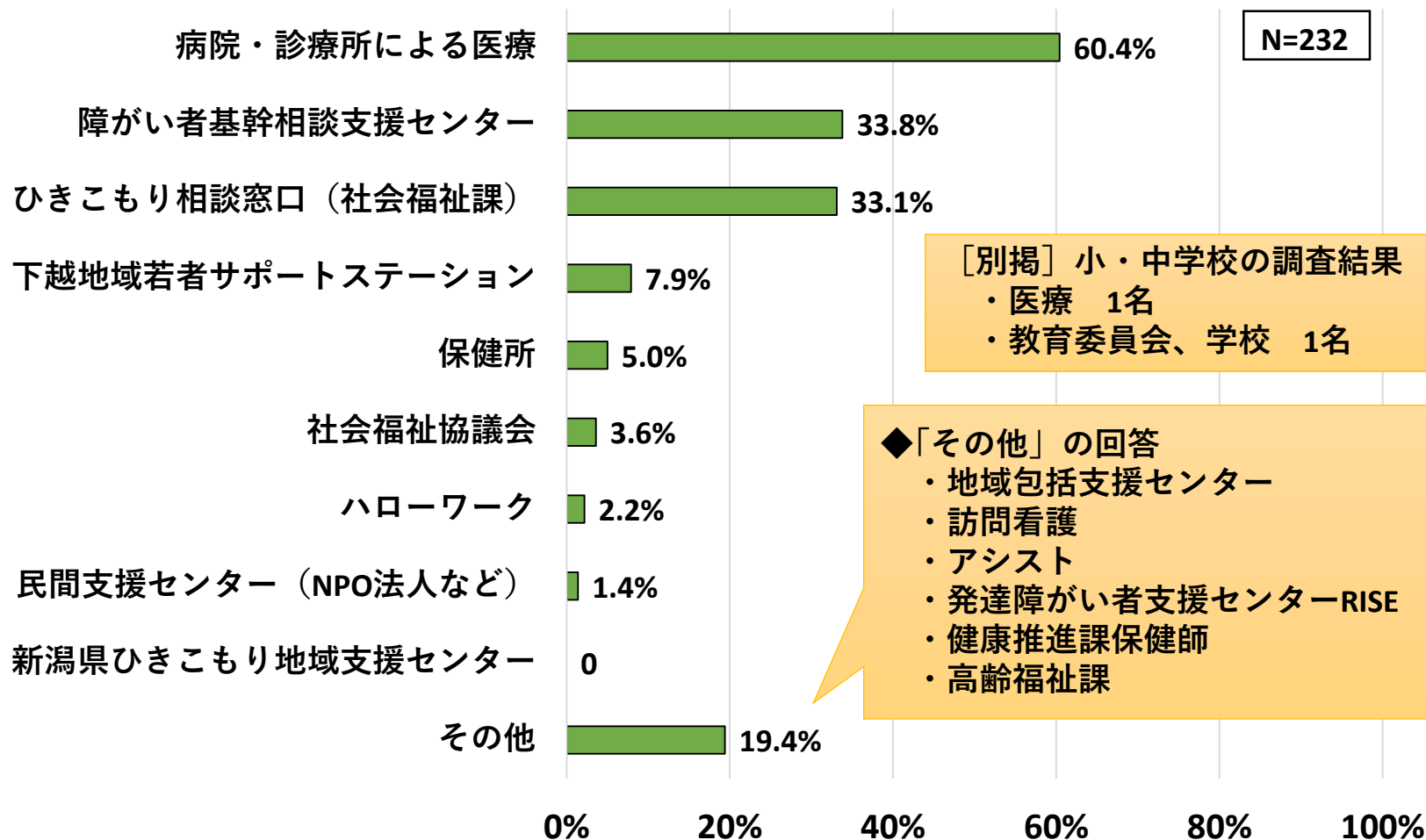
「医療受診や買物などに出かける」が6割以上であり、反面、「外出しない」は約1割であった。

B 9 医療機関や相談窓口等とのつながり



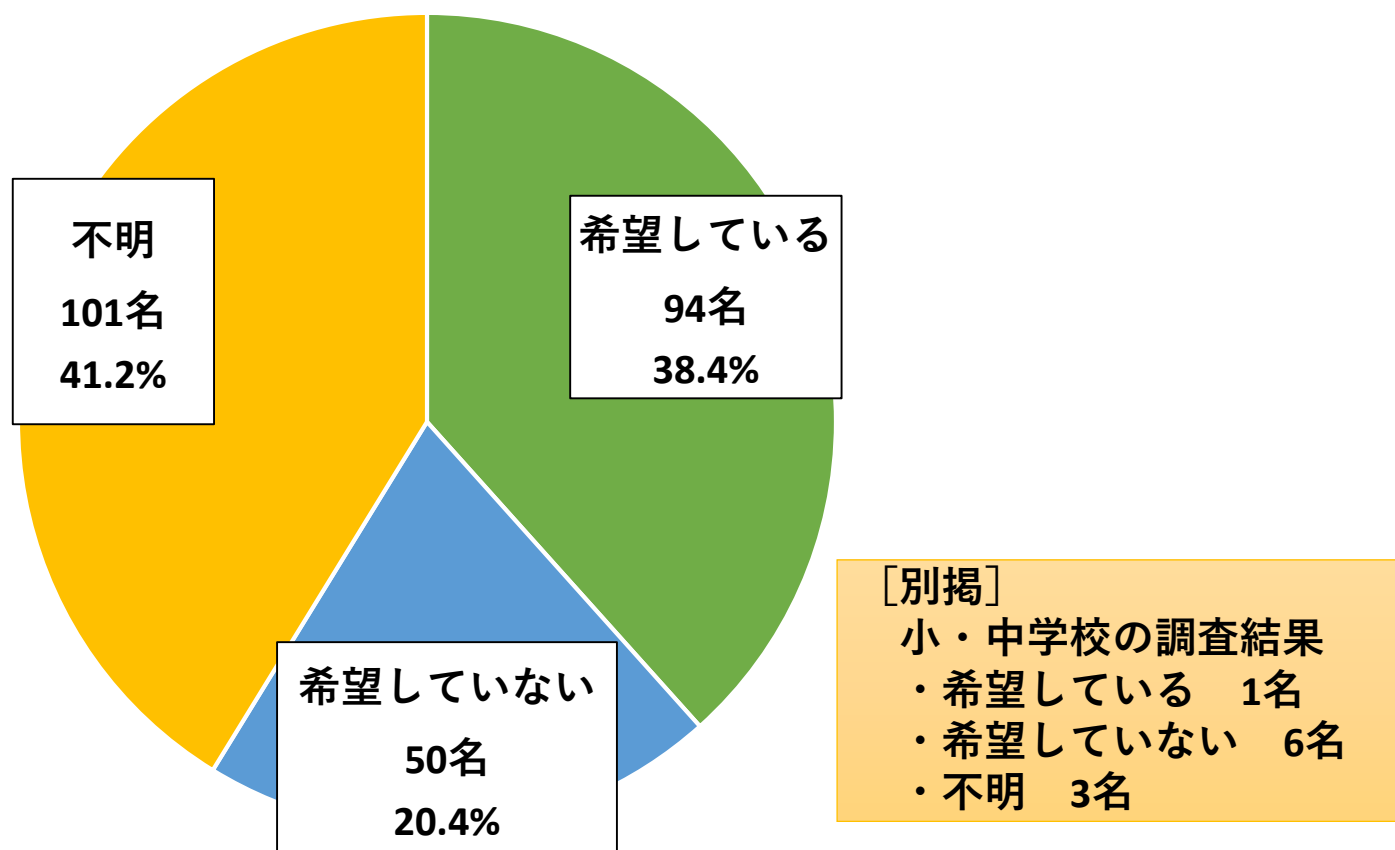
「つながっている」が半数以上であり、「つながっていない」は約2割であった。

B10 つながっている医療機関や相談窓口等〔複数回答可〕



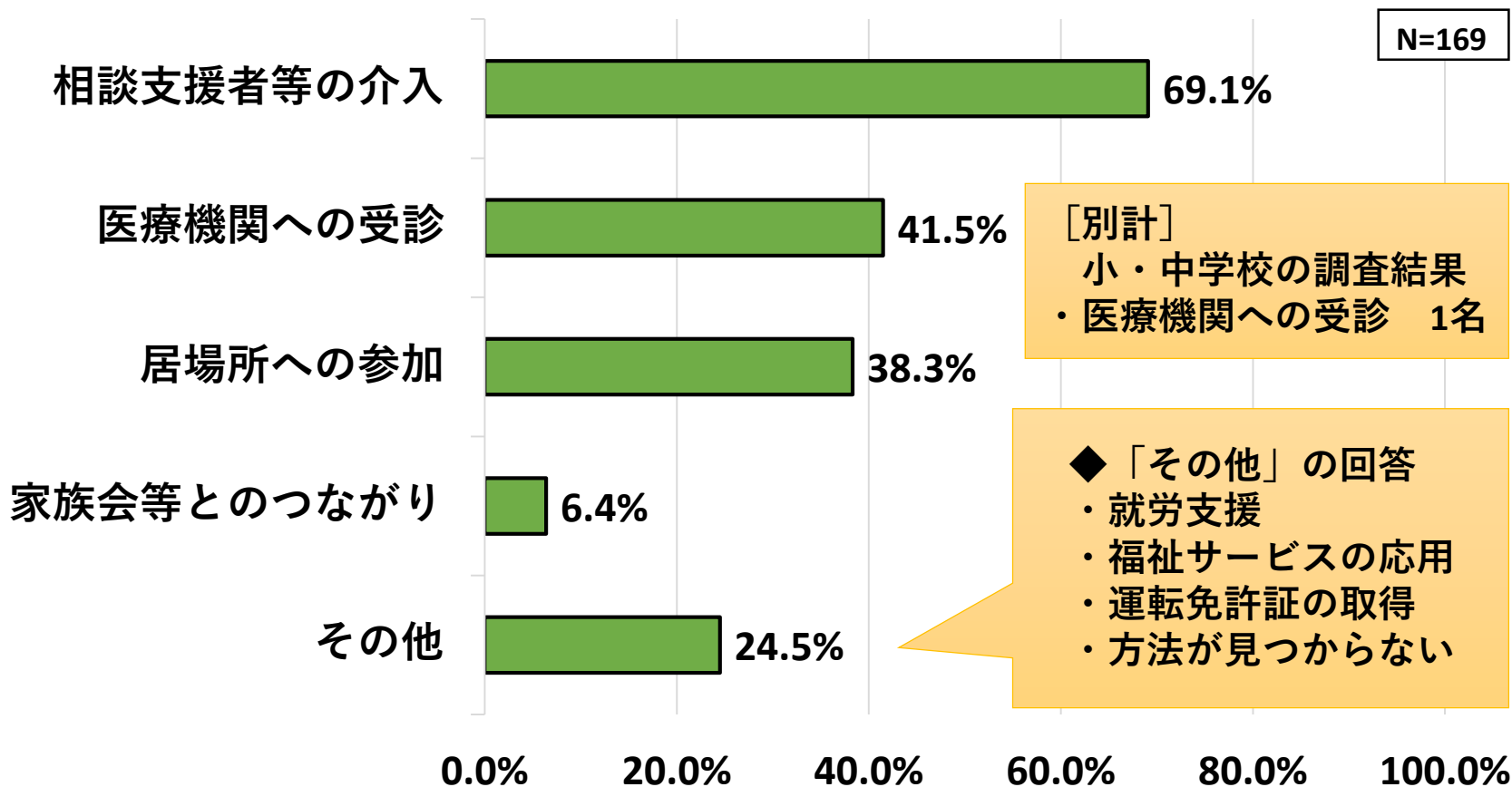
「病院・診療所による医療」が6割以上を占めている。「障がい者基幹相談支援センター」と「ひきこもり相談窓口（社会福祉課）」が、約3割であった。

B1 1 ひきこもり状態にある方やその家族の支援希望



「希望している」が約4割で、「希望していない」は約2割である。「不明」も約4割が多い。

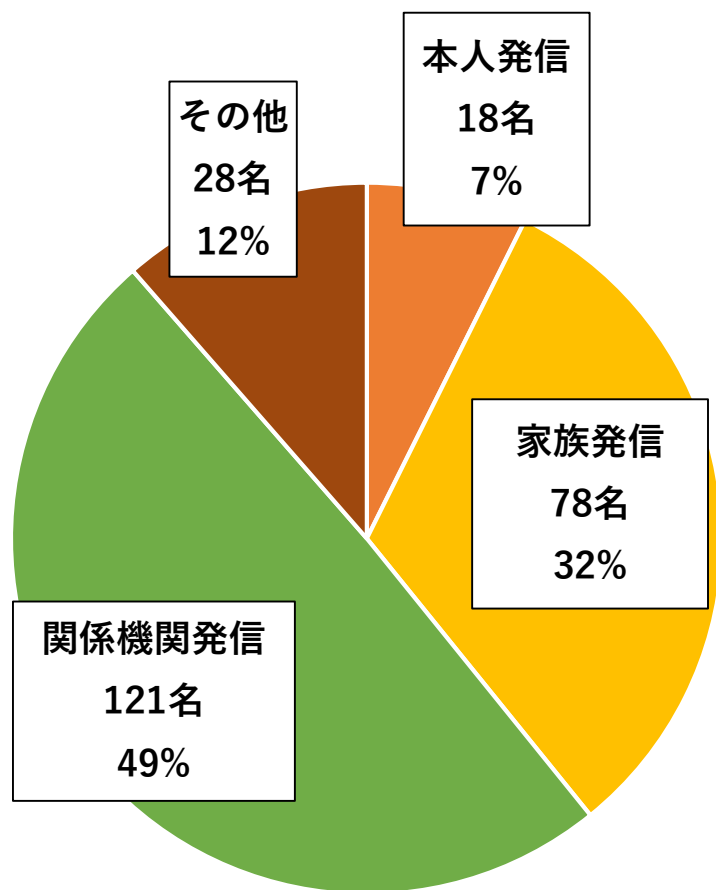
B12 ひきこもり状態にある方やその家族が希望している支援内容 [複数回答可]



「相談支援者等の介入」が約7割で最も多く、続いて「医療機関への受診」、
「居場所への参加」の順であった。

3. 調査結果からの考察

(1) ひきこもり状態にある方を知ったきっかけ



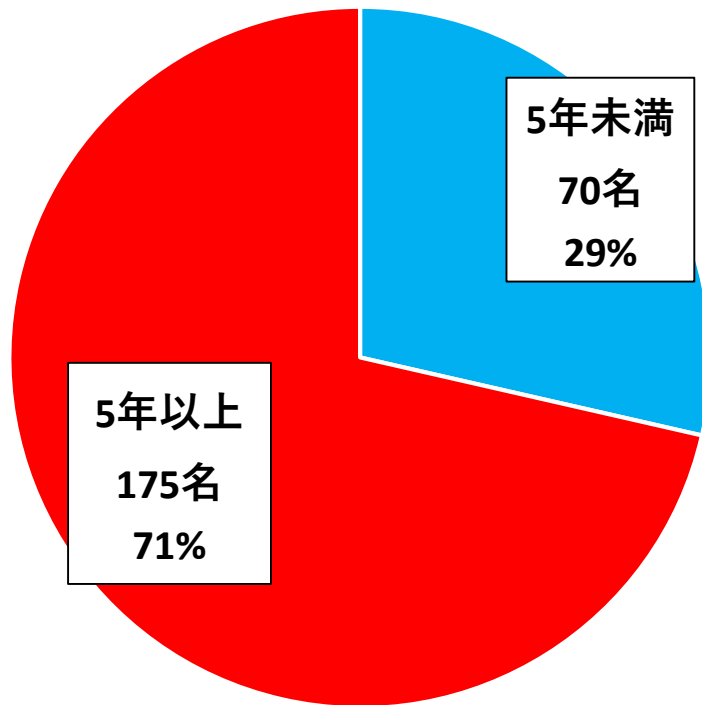
- ・「本人発信」、「家族発信」は合計して4割弱で、そのうち「本人発信」は1割にも満たないことから、自分からSOSを出すことはなかなか難しいと考えられる。
- ・ 積極的な相談窓口の周知、相談しやすい環境づくり、周囲の気付き、アウトリーチ（訪問支援）等を通じ、専門機関につながる支援が求められる。

(2) ひきこもり状態になったきっかけ

回答順位	きっかけ	回答順位	きっかけ
1	こころの不調	7	友人・知人との関係
2	職場での人間関係	8	いじめ
3	家族との関係	9	就職活動
4	からだの不調・病気・障がい	10	その他
5	不登校	11	不明
6	退職		

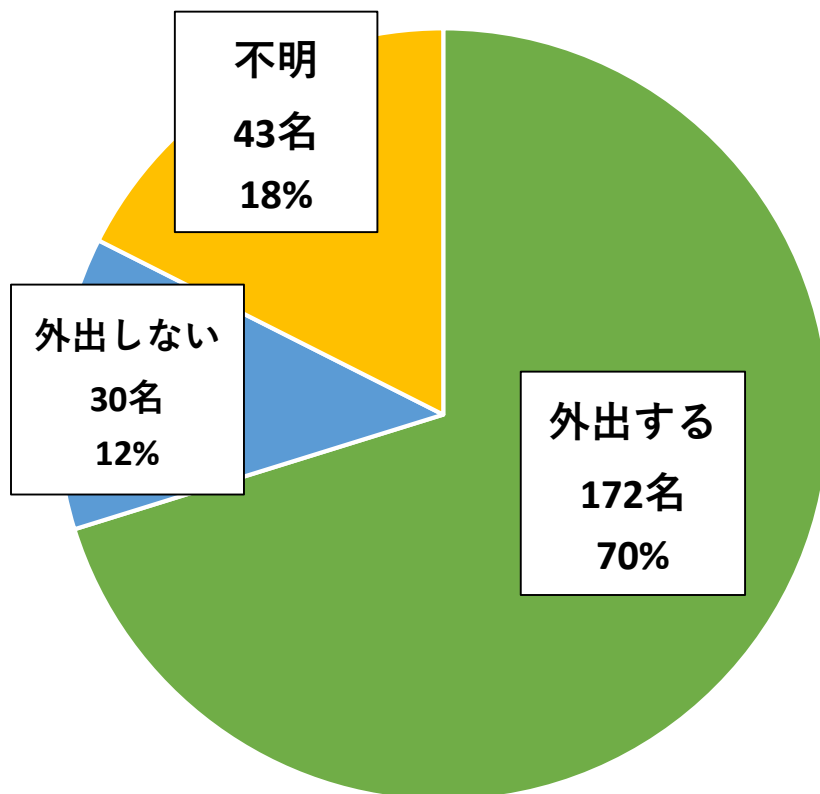
- ・きっかけは人によって様々かつ、複合的でもあり、誰にも起こりうると考えられる。
- ・そのため、その生きづらさについて、本人を取り巻く環境をアセスメントし、一人ひとりに適した個別支援が重要である。

(3) ひきこもり状態にある期間



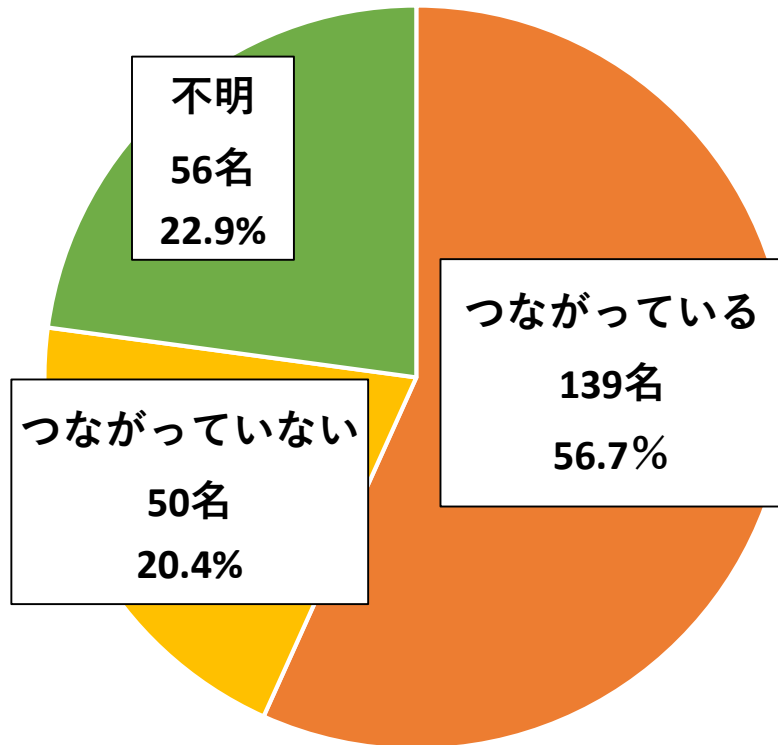
- ・「5年以上」が7割を超えている。
- ・ひきこもり状態は長期化しやすい回復が難しい傾向があるため、早期支援が非常に重要である。

(4) ひきこもり状態にある方の外出状況



- ・ 7割の方が医療受診や買物など何らかの形で外出している。
- ・ その一方、割合は少ないが、約 1 割の方は外出していない。
- ・ 外出はしているが、社会活動や他者との交流などの社会とのつながりが希薄となっている。
- ・ そのため、社会から孤立していくことが懸念され、社会とつながる支援が必要である。

(5) 医療機関や相談窓口等とのつながり



- ・ 半数以上の方はつながりがあると評価できる一方で、約2割の方がつながりがないという評価にもなる。
- ・ つながりがない方とどのようにつながりを作るのか検討が必要である。

(6) 関係機関との連携

回答順位	機関名
1	市ひきこもり相談窓口 (社会福祉課)
2	保健師 (健康推進課)
3	障がい者基幹相談支援センター
4	学校 (SC等を含む)

- ・ 公的機関との連携が上位を占めている。
- ・ より幅広い分野の機関が連携していく仕組みづくりが必要である。
- ・ NPOや身近な地域資源等のインフォーマルな支援を増やしていくことも必要である。
- ・ 「連携していない」が約2割であることも課題である。

(7) 支援者が考える支援の難しさ

回答順位	困っていること	回答順位	困っていること
1	知識や支援ノウハウがない	6	当事者・家族にアプローチできない
2	当事者が相談・支援を望んでいない	7	社会資源の不足
3	適切な対応がわからない	8	関係機関との連携が不十分
4	対応に時間がかかる	9	相談が継続せず途切れる
5	長時間経過していて、対応が難しい	10	その他

- ・ ひきこもり支援は国や各地域で始まったばかりであるため、支援で様々な困りごとを抱えていると思われる。
- ・ 関係機関がそれぞれの立場で一緒に考え、ノウハウや仕組みについて検討していく必要がある。

(8) 今後必要とされる施策

回答順位	施策
1	家族支援
2	専門的な医療支援・カウンセリング
3	相談窓口の充実
4	居場所づくり
5	相談窓口の周知・PR
6	訪問支援
7	学校や医療機関との連携
8	相談支援者のスキルアップ
9	地域の理解促進
10	就労支援
11	金銭的支援
12	社会体験活動の提供
13	ひきこもり啓発の講演会等開催
14	就学支援
15	NPO等支援団体の充実
16	その他

〈直接的支援〉

- ・ 家族支援
- ・ 専門的な医療支援・カウンセリング
- ・ 訪問支援
- ・ 就労支援
- ・ 金銭的支援
- ・ 社会体験活動の提供
- ・ 就学支援

〈間接的支援〉

- ・ 相談窓口の充実
- ・ 居場所づくり
- ・ 相談窓口の周知・PR
- ・ 学校や医療機関との連携
- ・ 相談支援者のスキルアップ
- ・ 地域の理解促進
- ・ ひきこもり啓発の講演会等開催
- ・ NPO等支援団体の充実

- ・ ひきこもり支援には様々な取組が求められている。
- ・ 直接的支援にスムーズにつながるような取組と併せて、間接的支援となる社会資源の充実が必要である。

(9) まとめ

〈伴走型支援〉

- ・ ひきこもり状態になるきっかけは様々で、その要因は複合的であり、一人ひとりに適した個別支援が重要である。

〈支援体制構築〉

- ・ ひきこもり支援には、多方面からの様々な支援が求められており、幅広い分野の機関が連携し、当市としての支援体制を共に考え構築していくことが重要である。